

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

夢のほたる

佐藤家の昔話（六）

編 武 田 正

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

夢のほたる

佐藤家の昔話(六)

編 武 田 正

夢のほたる

佐藤家の昔話(六)

237 236 235 234 233 232 231 230 229 228 227 226 225 224 223 222

猿蟹合戦のはじまり
一心は岩をも通す
阿修羅王
韋駄天
一つ目
青シシ
沼の台小町（蛇簪）
夢のほたる
虫送り
一分銀
名人大工
大工のおかた
山の神
生居堰
頭播磨に
和尚の首つり

36 33 32 30 28 27 25 24 22 19 16 14 12 11 10 5

お伽衆の昔話	255	254	253	252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	239	238
一寸法師																		
屁たれ嫁のあとばなし																		
蟻と虎																		
お女伏岩																		
ドンドンビキ																		
ホーロクとヤクト																		
手打ちと半殺し																		
ぼたもち																		
茄子の古種子																		
平種子柿の由来																		
三味線仇討ち																		
てんしつき																		
じんつあとまんじゅう																		
「とにかく」の由来																		
義民文太																		
古九谷の由来																		
飯田																		
お恵比須さま																		

凡 例

- 一、語り手の話をテープにとり、忠実に翻字した。
- 二、表記については、発音に最も近い言葉としたが、訛りは一部整理した。
- 三、収録の順序は、語りの順序とした。
- 四、資料集として編集・印刷した。

なおこの集に収めたものは、昭和四八年九月二四日に採訪したものです。

猿蟹合戦のはじまり

むかしむかし、じんつあとばんちやいたけずま。

そして、じんつあが百姓なもんだから、毎日毎日、山さ火^{かの}野ほりに行く。火野ほりていうのは、山さ火つけて、燃やして、そして畑こつくる。平坦地作るよりもずっと効率があえがったそう。雑草なんかも少ないし、それから上の方からずうっと雨水が、肥料^{こやし}がこけてくるもんだから、たいへん畑作としてはええがったもんだから、それをじんつあが山さ行って、火野ほりする。

寄る年波で、じんつあが若衆のように行かぬぐなつてはあ、だんだえ、毎年毎年こわくなつて（疲れて）くる。

ところが、ある時、ちよえつと見たら、ほの沢ガニが上手に土掘つてだ。

「ははあ、こりや一つ、ガニばたのんで火野ほること考えたら、なんとべ」

と思つて、そのじんつあが、ガニさ相談かけた。

「なかなか、お前、掘り方上手だから、おれさ手伝^けつて呉ねが。ほうすつどお前

の好きなものあげてもええから」

というわけで、ほうしたれば、そのガニは、

「んだら、何呉る」

「何呉るたて、まずおらだ一番貴重にしているのは、米の飯だ。いま、おらだ、ゴロビツというて、曲げワツパさもつて来ているが、こいつ、一つずつ食うんだら、一旦、まず元気よく働いていられる。とつてもええもんだ」

「はあ、こいつ、お前ださ、あしたから握つて来てけつから、何とか手伝つて呉ねが」

て。ほうしたら、次の日から、わさわさとガニ出はつてきたど。そしてばんちやさ、

「ばんちや、ばんちや、あそこの火野うない上げてきた」

「あららら、ら、あらいことなあ、じんつあ、あそこなど二日も三日もかかったんねが」

「んだ、んだげんど、ばんちや、あしたからヤキメシ二つずつよけいやって呉ろ」

「ヤキメシ二つずつなて、おかしいもんだ。きつとおらえのじんつあ、誰か他の女でも見けで、女さヤキメシ呉^けで、あそこ手伝わせだんであんまいか」

というわけで、ばんちや、ヤキモチやいて、こそりこそりと次の日追っかけて行ってみた。そしたれば、じんつあ、沢コさ行つたれば、

「ガニどの、ガニどの」

て呼ばたれば、ガニがざあつと出てきて手伝つた。ほだえして、二・三日やつてるうちに、ほのガニとじんつあが非常に近^{ちか}しくなつた。仲ええぐなつた。いろいろ一服して話の話題に出てきたんだげんども、そのガニがいうたど。

「じんつあ、じんつあ、まずあなたからもらつて行つたヤキメシ、とつてもうまいし、とつても栄養になつてええようだ。実はわれわれガニの世界には、三日から七日間、厄日ていうのがある。いわゆる甲羅の脱け殻になつて、蛇だら脱皮の時期がある。ほの時期ていうのは、俗にいうミソガニで、触つどペタペタするほど、やつこい体になつて、ほして土手のかげでひっそり暮さんなね。外敵もこわいし、食べものもうまく食べらんね。そういう時に、じんつあから頂いた貴重な

ヤキメシを村中で分けあって、その厄日の人さ、はいつ上げっだいから、何とか
じんつあ、はいつお願いさんねべか」

「よしよし、おまえだに（お前たちに）、ほだえ手伝ってもらったんだから、明日、
んだらば、またヤキメシ握って行つて呉れつから、はいつお前だ厄日どきに使
え」

「ほの代り、じんつあ、見てつど、非常にもの蒔いて、その穫んの上手だ、豆を
蒔いても上手にとるし、粟蒔いても上手に穫るし、その厄日んどき、おらだの目
玉が取れるんだ。ほの目玉蒔くと、きつと何かええもの出るかも知んねから、蒔
いて育ててけらっしゃい」

と、こういうわけで、約束して、次の日、ヤキメシ持つて行つて呉^けだ。ほして
じんつあが、ガニの厄日の目玉をまず一にぎりもらつて、はいつ蒔いてみた。と
ころが果せるかな、はいつから芽生えてきたものが、小豆だった。んで、今でも
「ガニの目から小豆が出た」なて言うことよく言うているが、実際そんな時、じん
つあが握り飯と交換した目玉が小豆だ。

ほしてこんど、そのヤキメシ持って行つたれば、つねがね山のおんつあ、猿がはいつ見てて、欲しい欲しいと思つて、頭をめぐらして、なんだ知恵で、あいつ取上げたらええべて、物語り聞いた。ほして、

「ガニどの、ガニどの」

て行つて言うた。

「はいつ、ヤキメシ食つて養生すんのもええげんども、柿の種子と交換すつど、まだええ」

「なしてだ」

「かいつ蒔いて、柿の木育てて、柿実^ならせつど、柿には渋ていうものある。その柿の渋をなめたり、塗つたりすつど、ガニの甲羅、一週間や十日待たねつたて、その日のうちに固くなる。どうか、こいつと交換しねが」

ていうて、交換したのが、さるかに合戦のはじまりだど。どんぴんからりん、すっからりん。

一心は岩をも通す

むかしむかし、唐の国に一人の若者がいだった。その若者が弓とつても、百姓しても村では指折りの若者だった。

ところがある時、ふとしたことから、

「いつか虎打ってみたい、弓で何とかして、虎打ってみたい」

と、念願した。なかなかその機会にめぐまれない。

ある時、弓持つて、天氣のええ日、ずうつと山裾の方行ったら、虎がねそべっていた。臥牛というから、牛が寝たようにねそべっていた。よし、ここぞとばかり、ほこき近寄って行って、ほして満月の如く弓をひきしぼって、ふっと放った。ほうしたら、果せるかな、そいつあズボーンと虎さ刺さったが、虎は動かない。よし、仕留めたというわけで、行ってみれば、はいつは虎に似た岩だった。ほして、

「はあ、こりや、虎だと思ったら、岩だった。おかしいこともあるもんだ」

と思つて、戻り帰つてまた打つてみたげんども、後は矢は立たねがった。んだから、虎打ちたい、虎打ちたいと考えて、一心になつて打つたもんだから、一心は岩をも通すて、ほの時から言つた。そういう風になれば、石に矢の立つためしありということ、まず、ほこらここら評判になつたつた。どんぴんからりん、すっからりん。

224 阿修羅王

むかしむかし、支那の国に阿修羅王という王さまいだつたど。

この王さまは八面六臂、毎日二六五日、朝から昼晩、戦争してないと気すまね。攻めれば必ず落ちる。戦えば必ず勝つた。まず戦にかけては、この王さまぐらい強い、いなかった。

ところが、人間ていうのは、戦争ばっかりしているの好んでいる人ばかりで

ない。で、いつかは敬遠されで、嫌らわつできた。ほんでも、その王さまは暇さえあれば戦争しかける。そっちの国、こっちの国、戦争ばかりした。んだから、今でも戦争の場になつど、修羅場ていう、その阿修羅王の修羅をとつたんだど。どんびんからりん、すつからりん。

225 韋駄天

また支那に、ある王さまいて、そこにはすばらしいソロモンの壺といわれる、優秀な宝ものの壺があつた。あるとき、何ものかに、妖怪に、はいつ盗まれかけた。

また、盗んだその妖怪の速いこと、あれよあれよという内に、そこを遠去かつた。ところがその王さま、

「誰ぞある。あれを引捕えてくる者、いねが」

て言うた。ほしたら一人の若者が出て、それを追っかけた。またその追っかけた足の速いこと、スタスタ、スタスタ、タッタツというど、飛ぶように、飛鳥のように、その妖怪さ追っかけて、たちまちひっ捕えて、その壺を取りかえしてきた。

「お前は、何という者だ。何という名だ」
て言うたら、

「韋駄天めでござります」

て言うた。今でも足の早い人ば、韋駄天みたいだとか、走り方ば（韋駄天ばしり）なて言うけど。どんぴんからりん、すっからりん。

ある時、ある部落の若者が山さ柴刈りに行った。ところが隣の国の峠のあたりまで柴刈りに行ったれば、やっぱり向うでも柴刈りしつたのいだけ。ちよえつと見たれば、眼まなぐ一つだけど。

「あららら、一つ目だりや、おかしいな。一つ目の人見てきた」
て、部落さ来て語つたれば、

「べらぼう。ほだな一つ目の人なて、いるもんでない。めっこか、たっこでもあんべな」

「いや、んない。一つ目見て来た」

「んだらば、また、いかも知んねえから、んじやてみる」

ていうわけで、友だちとほこさ行つてみた。ところがやっぱり、はいつあ一つ目の人だ。ほしてほこで、

「何んだ、お前、目一つしかないのか」

て聞いてみたれば、ぶつ魂消たけど。

「なんだ、お前だ、目二つあんの、おら方皆一つずつだ」

「ほだごどないべな。人間はみな二つだべな」

ていうごどになつたつて。

「んじゃ、おら方の国さ、んじやてみろ」

て行つたれば、魂消た。途中まで行つたれば、

「あらら、目二つの人きた」

て、向うでも魂消たけど。

「目二つの人来たぜ、みんな村中出て見ろ、まず」

ていうわけで、村中の人が出はつて来て見たつて。したけあ、

「かいつあ、珍らしいから見せものにするにや、おさえろはあ」

て、二人はほこでおさえらつただけどはあ。

「くそ！ここでおさえらつでは、家さ帰らんね、まず」

ていうわけで、一生けんめいもがいだど。したれば、

「なして、ほだえ寝相わるくして寝てんだ」
て。結局、はいつあ夢だったど。どんぴんからりん、すっからりん。

227 青 シ シ

むかしむかし、この辺に青シシていうのいだったど。先には肉のシシていうたもんだが、熊をシシていうたか、イノシシ、青シシ、いわゆるカモシカのことを青シシていうた。この青シシというのは、貴重であった。なぜなら、肉は肉で非常にうまい。皮は毛皮として大したもんだ。角は浜辺に持つて行くと非常に高く売った。浜辺ではその角で、今だら集魚灯なて使うげんども、むかし集魚灯の役割りするのは、このカモシカの角だ。まずこれを海中に入れると、青白く光って鰹・蛸・イカみな集まってくる。んだもんだから昔の人は、タバコ入れの根つけさなの、青シシの角つけて、金なくなつど、浜辺で、はいつ売つて、はいつ路銀

にしたもんだど。

ところが、そのカモシカのうち、鮎色角が最高だ。鮎色角一本もつていたらば、千金をもつたと同じだど。まず、こだえ魚寄ってくるものない。ひと財産、ふた財産も、まず魚とりで取れっからって、鮎色角のカモシカというのは、非常に貴重だった。

ところが、周辺で誰言うもなく、鮎色角の青シシいだっけど。「よし」というわけで、そこさ神尾善兵衛という人―七ヶ宿の―が、

「んじゃ、おれは鮎色角の青シシをとる」

というわけで、熊打ち、青シシ打ちの名人で、三日三晩ぐらい飲まず食わずで泊っても大丈夫だという人、いだった。

その人が、いよいよもつて堅雪になつてから、火縄銃背負つて、熊のホクチ（火口）背負つて行つた。横川部落からずうつと登つて行つて、不忘山、ほの裾を通つて磐上山の方さきた。ところが、はたせるかなほこに鮎色角を頭としてのカモシカの一群だった。それを見て、至近距離さ行つて、一発ぶつ放して攻めて呉んな

ねと思つてた。ところが傍さ近づくとはどんどん逃げる。野越え山越え行つて、もう少して射程距離だていうどこまで行くと、また逃げる。決して急いでは逃げね。^{ひして}一日は何とも仕様ない。二日追つた。いよいよもつて三日さ入つた。

ほんでも、もう少していうと、さつと逃げて行く。そして傍さ寄りつかんね。

向うは獣で身軽るで、堅雪とはいいいながら、日影前なていうと、和カンジキ履いて歩くと、なかなか追いつかんね。んで、善兵衛さんが考えた。

「こりや、追つて行くど、わかんねんだ。何か向うで目じるしにしているに相違ない」

こういうわけで、稜線^{しゃつぽ}さ帽子、それから襟巻のようなものを、木を切つて、いかにも人がここから見つたようにして、かげの沢から廻つた。

さすがの飴色角も、はいつに気付かねで、よくよく傍さ行つたら、その群衆と離つた、一匹だけ別の方さ走り出した。ここぞとばかり、この火縄銃さ火つけて打つてしとめた。何のために自分ばりそつちの方さ行つたていう謎が、その直後にわかつた。ところが、一行はみな腹の大きい、妊娠した、いわゆる青シシばり

だった。んだからそれを助けるために、一人犠牲になって、一匹ばり別の方さ走って行った。はいっわかって、神尾善兵衛という人は、

「動物でさえも夫婦の情、親子の情はあるんだな」

ということわかって、その日からぶつり狩人やめてはあ、普通の百姓になつたつたど。どんびんからりん、すっからりん。

228 沼の台小町（蛇簪）

むかしむかし、山形の在に、沼の台というところあつた。

その沼の台小町といわつだきれいな娘いだんだつたど。で、夜な夜な、娘さ遊びにくるお殿さまいて、そして家でも心配して、

「お前、誰がお前さ遊び来んなだ」

て聞いたれば、

「山形の家老さまだ」

「ほうか、名前聞いたか」

「名前聞かねげんども、立派で、普通の町人百姓相手とちがう。きっとあれは家老さまにちがいない」

「んだげんども、ほだな、名前もきかねで、将来一緒にもならんねようでは……」
て言うわけで、

「ほだら、ほの袴さ、針さ糸通して、はいつ袴さ刺してやれ。そしてその後行つてみる」

ていうわけで、次の日なつてみたら、山形の方さ行かねで、山の方さ、ほの糸が引っぱつていだっけ。おかしいおかしいて行つてみたれば、土手のかげから聞いたならば、蛇の親子の話しが聞えつて。

「お前、なんぼなんたて、生じつか蛇の分際でありながら、なんぼきれいだて言いながら、ほの、小町娘いいながら、人間さ恋するなて、もつての他だ。そのお前の体、膿^うんできてはあ、錆^さの鉄の毒まわつてきて、まもなく分かんねどらはあ」

ほして、

「おれは後とり作ってきた」

「後とりなの作ってきたって駄目だ。人間は賢いからって、はいつ墮ろす葉知っていんだ。春は桃酒、夏はマタタビ、秋はホオズキ、冬はフキの根。これを使うと、たちどころに、ほだな皆墮ってしまう」

ほして、その娘が妊娠したのば、そいつの何かで墮とす。ところが蛇がそこでもだえ死んでしまった。

その娘がたとえ蛇といいながら、おれに対しては何日かの恋人であった。かわいそうであつたというわけで、杉の木一本植えて、ほして供養したど。

その杉は今でもあつて、麝香^{じゃこう}杉て言うてる。その家は今でも麝香を名のつて、現在の当主は麝香長八さんだど。それが麝香家の由来。どんぴんからりん、すっからりん。

229 夢のほたる

むかしとんとんあつて、ある部落で夜寄合いをした。今みたいに電気ないもんだから、行灯で、あるいは焚火でタイマツなど焚いて、寄合ひした。

ほだえしているうち、日中の労働が激しがったがして、一人の人がうとうとと、そこさ眠ってしまった。ほしたら、何だか鼻のあたりからほたるのような、ぽかつと飛んで行つた。

「あらら、ほたるみたいな、ぽかつと飛んで行つた」
と思つて見つた。

「へえ、不思議なこともあるものだ」

まあ、一刻ほどしたら、そのほたるが帰つてきた。そして鼻の中の方さ、ちょろちよろと入つて行つた。そしてムニヤムニヤ・ムニヤと起きた。

「君、何か夢見ねがつたが」

「いやいや、夢見た。こういうところさ行つたら、すばらしい穴あつて、穴の中

から入って行って見たれば、金銀財宝、すばらしいもんだけ」

て。

「いや、はいつ夢」

「夢っだな、こりや、おれ眠ったんだれば、あんな夢見たことない」

ほしたれば、その人あ我慢さんねくてはあ、ほっからすぐ走って行って、ほこ探してみた。やっぱり穴あつけ。行ってみたれば、やっぱり話のとおり金銀財宝すばらしくあつけ。よしこれだ。というわけで、取りはじめたれば、崩れはじめた。いや崩つで崩つで、何とも仕様がない。こんど爪ではだげて、逃げんなね、いや、だんだえぎつつくなつて、何とも仕様なくてはあ、もう手など痛いんだか、何だかわからね。棒みたいになつてはあ、ガツガツ、ガツガツかっちゃいだ。最後の固いものあつて、何とも仕様ない。はいつ、命がけでワツと押しあげたれば、ヒョコツと出はったのが、自分の家の藁打ち石、押し上げて出はったけど。

ほして手見たらば、手には爪さっぱりないがったど。指まで減つてだ。んだから、ずるいことすつど爪抜けんぞて言うな、ほっから来たつた。どんぴんからり

ん、すつからりん。

230 虫 送 り

むかしむかし、源平時代に、斎藤別当実盛という人いだんだけど。

源平の合戦の折に、斎藤別当実盛という人が稲株さ引つかかって、ほして転んだ。ほこ源氏の侍に打だった。んだもんだから、稲株ささえ上がんねど、殺さんねがったというわけよ。その人、百姓をうらんで、すばらしい稲虫、いわゆる螟虫ずいとウンカが大発生して、餓死する寸前まで行った。

ほの話がずうと百姓から百姓さ聞えてきて、ほんではというわけで、稲虫流しているのした。というのは、斎藤別当実盛の格好を藁で作って、そして、供養をしながら、

「稲虫出さねようにしてけらっしゃい」

ていうわけで、稲虫を部落の人、みんなして出て、稲虫流しという行事、それからやった。

で、ここでも稲虫流しという地がある。今、梅本沢というげんども、昔の人は稲虫流しといていた。

231 一分銀

むかし、上の山からこの辺さ魚屋いさばやが背負ってきた。そして魚売った。

ほんどき、ほの魚屋が榎下のしくじりまできたら、キラキラ・キラキラ光るもの落っでた。何だべと思って、ねつく見たれば、一分銀。一分銀といえ、ワラジ二足で三文の時代。

「誰落したんだべ」

とあって、あたりほとり見たげんど誰もいね。んで拾わんなねと思ってワラジ

でふぐぐつてみたげんども、なかなか取んね。一案をめぐらした。ほの魚屋、

「よし、一つ、小便でとかして呉けましょう」

というわけで、小便たれはじめた。ほしたらば奥さんに、

「何だべ、温ぬかくなた。赤子んぼこだと思つたれば、おつつあんだど、こりや。何した
まず」

て言わつた。こっちはほに、十日ぶりも稼ぐつもりで小便たつた。

「いや、こういうわけだ、かあちゃん」

て語つたれば、

「つねがね貧乏して、心持まで貧乏してつからだ。ほだな一分銀も落しておくな
んて、ないべな」

て言わつて、

「いやいや、こりやまず、失礼しました」

というわけで、けりがついたど。どんぴんからりん、すっからりん。

232 名人大工

むかし、この宿に、大工のうんと腕のええのいだったど。

ある時、坂下の方、山形近在さ頼まつで行つて、家一軒、木取った。いよいよたてまえずんべと思つて、仮すくみすんべと思つたら、なえつたて狂つて、仮すくみさんね。

「困ったこりや。困った。材料置いて逃げんなねか」

て。この辺では大体、材料は杉、松であつたげんども、山形周辺はハンの木だった。ハンの木に対する知識は、棟梁もぜんぜんなかつたもんだから、

「まず困ったこと始まつた」

て言うたらば、そこさ子どもだ遊びに来て、

「大工さん、大工さん、いつ餅撒きする」

「餅まきざあ、たてまえのことか」

「んだ。おらだ餅拾いに来っからよ」

「明日だ」

「明日なて、うそだべな。大工さん」なて言うた。

「なして？」

「柱、川さ漬けねど、こら」

「ははあ、川さ漬けつど狂いとれるんだ」

て、その日、まず子どもらに教えらつて、いきなり川さ漬けて、たてまえして来たんだど。んだから場所がちがえば、やつぱり、郷に入つでは郷に従えていう。わからねことあるもんだて語つてだった。どんぴんからりん、すっからりん。

233 大工のおかた

むかし、家のたてまえの時、女衆おなごの鏡とか、髪の代りに麻とか何とか、いろいろ、ああいう風な使うのは、みんなこの、女のことから始まった。

ある時、お観音さま建てる時、ある大工さんが前の御拝柱、間違つて短かく切つてしまった。

「いや、困つたこと始まつた」

したら、

「何ほだえ、とおちゃん心配している」

「こういうわけで、柱五寸短かく切つてしまった」

「あら、ほだな造作ないっだな。前さ袴はかせつどええっだな」

というわけで、金の袴はかせて、はいつかくして、袴はかせて難なく行つたど。

ところが、かかに教えらつたとなつど、恥になるというわけで、その奥さんは殺してしまつた。

して、夜な夜な悩まさつだもんだから、はいつの供養のために、女衆のものを飾るといふ所と、もう一つは……。

風がきて、風が来て、何ともたてまえさんねがつたど。その風なんか防ぐ方法ないべかというたら、その奥さんが、

234 山の神

「前さ一丈もある風車こしらえ、んだど、その風車で風あ切れて、右と左さ風あ切つて、風車で、風がなくなつてしまふから、そんな時たてまえしろ」

て教えたから、殺さつたど。

ていう説と二つあつていうことだけど。どんびんからりん、すつからりん。

ある木こりが山さ行つて、木切んべと思つた。

あるとき、ところが、何だかその日に限つておかしい。ほしたらばほのちようどヒョットコ面かぶつた人が出てきて、

「今日、木伐んな」

て言うた。

「今日、木伐んな、なて、なしてだ。おれは木伐る。おれは木伐んないで暮さん

ねなだから、今日伐んなだの、明日伐んなだのていらんね。なんだ、にさ、ほだな格好して、木伐んななて、人さ何言いに、ほだなこと指図する」

ていうので、斧振り上げれば、すばらしいカラ木返し of 音した。ほしたけあ、体中しびつでしまつて、振り上げた斧降すどころか、だんだん目も見えねぐなるようなことになった。

「ああ、こりや困つた。山の神さまにでも、祟らつだんであんまいし」

ていうことで、一生けんめい山の神さまさ悪るかつたというこゝで、念じたれば、だんだえそれが治つてきたけあ、そのヒョットコみたいな顔だと思つてたの、こんど神主さまの顔に變つて、ほして、

「今日は山の神さまが木を数える日だ。今日木を伐つてはなんねえぞ」
て言わつて、その人はまず木伐りをやめて歸つてきたつたて。

んだから、それからというものは、この辺では、彼岸の中日は山の神さまが、木勘定する日だと、こういうわけで、木伐らねことしつたど。どんびんからりん、すっからりん。

むかし、中川部落（上山市中川）と宮生部落（上山市宮生）と水利権、いわゆる水けんかが始まった。

ところが、どうしても永野（上山市中川・永野）勢が強くて、堀切りから土・い作って、生居（上山市宮生・生居）の方さもってくる。向うの方は堀切りから永野の方さ流す。ほんで、何としても榎下さお願いすんなねというので、願ひにきた。て、榎下ではけんかみな大好きで、力持て余してばりいたもんだから、どういうことやったかていうど、石弓というもの作った。石弓ていうのは、バイタ（棒）を一尺五寸ぐらいに麻ひもを縋なって、麻糸くつつけて、その先さ石ば縄でくるんで、ぐるぐる振り廻して遠心力利用して投げてやっど、普通の手で投げるより倍も、上手な人は三倍も投げよかった。宮生の生居衆は、ほこでちようどええような石みな集めて、川原前から、ほして高台に背負って行つた。榎下衆は、ほっから石弓さ掛けてビュンビュンと永野勢の方に投げてやっした。ところが人気ひとけ

もないどこから、石はぼんぼん、ぼんぼんふつとんでくる。

「ははあ、こりや檣下衆が加勢したな」

というど、これは駄目だ。檣下勢加勢したんではとてもかなわねていうんで、中川勢はそつから退却した。ここぞとばかり生居勢は、土あいを、どんどん掘つて、こつちの方さ水もつてきたど。

それで、ことなきを得たというわけで、檣下さ、

「どこでもええから、一番ええどこ取つてけらっしゃい」

ということど、三千刈を檣下さくれたんだど。大田中というどこにある。

236 頭播磨に

むかしとんとんあつて、むかし殿さまさ呼ばれて行った。

「これこれ、与左衛門、世の中で一番氣持ええがったことはどういふことか」

「はい、まず殿さまからお言いつけなつたことを完全に果して、出来ましたというときは氣持ええがつた」

「うん。ほれから」

「ほれからは、自分の思う通り行つたときには、何でも、こうすんべ、ああすんべと考えたことを思う通り行つたときには、氣持ええがつた」

「あとないか」

「いま一つある」

「なんだ」

「道中してで、そして、なんだてまずい話だげんども、うら心して来て、何とも仕様なくて、ほしてほいつやらかしたときには、こりや氣持ええもんだ」と言つたら、ごしやがつた。

「何だ、無礼者、尾箆な話すんな」
て、ごしやがつた。

ところが江戸さ行く時、何の食い合せ悪いもんだか、殿さま、腹少し具合悪かつ

た。

「これ、三太夫、余はうら心地して来たぞ」

「何だ、殿。はしたない。野糞なて殿さま、さんない」

こういうわけで、殿さま、ほとほと困った。ほして与左衛門はおらんかということ、与左衛門を思い出した。与左衛門は、殿のどこさ行つた。

「与左衛門、我慢できない。脂汗出てきた」

「お殿さま、お殿さま、あなたのおっしやり方悪いんだ。ちよつと歌詠みに行つてくるて言わんなね」

そして籠停めて野原でやらかしてきた。ほして来たら、三太夫も、

「殿、何と作つた」

したらばこういう歌つくつたていうんだな。

道中に国二つを設けたり

あたま播磨に 尻は備中

て作つたけど。ほしてほん時はじめて、

「ああ、やっぱり、こだえ気持のええこと、世の中にない」

殿さま言うたて。どんぴんからりん、すっからりん。

237 和尚の首つり

むかしむかし、薬屋して生計立てっだ人いだった。ところがその薬屋は地元ばかりで商売なんねもんだから、他国まで行つて、ここならば、置賜とか七ヶ宿あたりまで行つて商売してくる。ほして商売して帰つてきて、生計立てっだんだど。

ところが、ある人がその薬屋さ教えだんだど。

「お前の留守の間に、どうもお寺さま出入りしている。おかしいぞ」

はいつ聞いっだ薬屋

「なんだ、横着かか、ほに。人ば稼がせて家にいて、お寺さま寄せっだなて、とんでもない話だ」

ていうわけで、稼ぎ行くふりして家さいきなりもどって見たれば、ほに、お寺さまいたわけだ。ほいつお寺さま置いっただなて言うていらんねから、泡くって、ほれ、奥さん隠したど。どこさ隠したと思つたら、井風呂の中さ隠した。はいつ見っだほの亭主は、

「かあちゃん、かあちゃん、急に腹いたくなつた。まず、お湯湧かして呉ろ。お湯さ入って、それから医者さ掛んなね」

て、まず腹温めてみたら、ええかも知んねからて、「火焚いて呉ろ」というわけで、火どんどん焚いて、煮立つほど火焚かせて、上さ、湧かねどなんねから、というわけで、臼ば上げた。ほうしたれば間もなくお寺さま、肥溜さ入った蛙みたい伸びてしまったんだどはあ。ほうしたけあ、はいつ見届けて、ほの薬屋、

「何だか、今まで痛いのがええぐなつた。んではまず商売行つてくつから」
て行つてしまつた。

困つたのはその奥さん。人一人殺してしまつて、何とも仕様ない。自分が悪いのだから、どさも訴えようもないし、困つたもんだと思つて、

「ほんでは、村でも頭のええ人いたから、そこさ行つて相談すんべ」

というわけで、そこさ行つて、

「こういうわけで、まず、おれの不始末で何とも仕様ないげんども、助けてけらっしゃい」

て、相談に行つたど。

「ほだな簡単だ。お前さ惚れでいんな、いま一人いた。あの野郎、助べえなばかりでなく、手癖もわるいから、ちようどええ」

てだど。

「はあ、ほんでは、なぜすんべつす」

て聞いたらば、

「簡単だ、家さ行つて、その人ばたのんで、まず、お茶飲みごさしやいて、そのば、へほれ、むかしは搗き米、全部梁ささげたもんだ、虫になんねように、米さげて呉ろて頼め。ほして死んだば俵さ入つて三つ並べて、三俵さげてけらっしゃいて頼め」

ところが、「お茶飲みにござっしやい」て言わつて、つねがね心にくくなく思っているもんだから、いきなりお茶飲みに行つた。ほして話して、いろいろお茶のみしているうち、

「お願いあるんだげんども」

「いや、何だ」

「米、ぶら下げてもらいたいんだげんども、虫になつから」

「何俵？」

「三俵だ」

「ああ、ええどこでない」

ほして、

「ほんじゃ、おれちよつと用達し行つて来つから」

て言うたれば、米三俵ていうな、ピンと頭さ来たもんだから、親父は自分の家から糠俵もつて行つて、糠俵と米一俵しかえて（取換えて）来たんだとはあ。ほしてちよつと米一俵ぐらいな目方あるもんだから、糠俵と米二俵と下げて、ほし

て和尚入ったのば自分がかついで来た。盗んできたわけよなあ。手癖わるいもんだから。

ほうして家さ来てあけてみて、ぶっ魂消た。中から和尚は蛙のふやけたみたいになんて出はつてきた。いや、ぶっ魂消た。ぶっ魂消たげんども、自分がしてしまつたもんだから、仕方ない。これは困つたもんだというわけで、またその物識りの家さ聞きにくた。

「ああ、ほだごとあつたか、君もあんまり助べえと手癖わるいことさんね」
なて、まずおどさつだくらいにして、

「ええか、あの寺もはあ、二・三日、寺あけているんだ。三・四日お寺いねくてはあ、まず、はいつは世間の人みな知つてはらずだ。死んだからいねわけた。んだからまず、お寺に寄合い触れろ。ほして、お前がみんな集まつてから行つて、ほして、門のどこさ、山門のどこさ、首結^ゆつばいて、ぶら下げておけ」

「ほだごとして大丈夫だべがつす」

「なぜなつか、してみろ」

ところが、ほれ、寄合い触れらつて、みんな御堂さ集まったわけだ。お寺いね。

「なんだて、あのお寺、助べえだ助べえだて話聞いた。どこの家の後家かか探しに行ったべ、まず。今夜もいねどれ、まず。寄合い触れておきながら…」

なて言うて、

「あだなお寺だら、ぶん殴つてしまえ、ひっぱだいてしまえ」

なて語つた。ほして一番おそく、和尚をぶらさげてやつて行つた。ところが、その話で沸騰していた。その大將も、

「なんだ、お寺さま、まだいねが、おれおそくなつたげんども、どさ行つたかわからねずはあ」

ほうしたけあ、ある人がちよえつと小便たれに立つて、ぶつ魂消た。山門さぶら下がつた。

「大変だ、大変だ」「なんだ」「お寺さま、首くくりした」「はいつは、なしてだ」て、皆。

したれば結局、

「あだなお寺、ぶち殺してしまえ、あだなお寺、追出^{ほだ}してしまえていうの聞いて、良心さ恥じて、首くくりして死んだんだべはあ」
というわけで、二人とも何とも、難なく通りすぎだど。どんぴんからりん、すつからりん。

238 お恵比須さま

むかしむかし、恵比須さまというのいて、この人は雑魚とり上手、百姓の方も上手だった。

んで、百姓の方ではいろいろなこと教えることやつてだ。まだ雑魚とりはそれはそれで教えていた。

ところがその村に対しては非常に恩恵あったげんども、隣村からは非常にねたまっていた。

「あそこの部落、あだえ発展していんのも、お恵比須さまのおかげだ。こりや困ったもんだ。おら方は、まず火消えたみたいなもんだ。何とかお恵比須さまば、一つ、なき者にしなければ、おら方の部落は立つて行かねことになる」

と、こういうことだ。

ところが、その部落では、お恵比須さまていうのは、非常に餅好きで、餅たらふく食った後、大根おろし食うそうだ。んで、ある時、お恵比須さまが隣部落さ招ばって行つた。

ほだごと知しやねで、餅たらふく御馳走になった。さあ、大根おろし食うべと思つたが、どさ行つても大根おろし食^かんね。ほしてあるところさ行つて、

「大根一本呉^けでけらっしゃい」

て言うたらば、

「部落法度で、大根は絶対、あげらんね」

ほっちゃ行つても、こっちゃ行つてもはあ、大根がなくて、ほとほと困つてしまった。こんどは腹がぎりぎり痛くなつてしまった。ほして、

「仕方ない、水でも飲むか」

て言うのと、水飲み^に川端さ行^{って}みたところが、一人の女が大根洗いし^{った}けど。

「あねちゃん、まず、おれは死ぬか生きつか分^んね。腹痛^くて、何とも仕様^{ない}。まず餅の食^いすぎで何とも仕様^{ない}から、大根かじ^らせてもら^わんね^べか」

て言うたど。

「いや、実は、おれんどこの大根も本数勘定^さつで^だんだ。んだげ^んども、正直ここに股大根一本あ^っから、股の方はあ^げる」

て、股の先の方もら^つて、ようやく腹^なお^つたど。ほして女ばあ^りが^たく^て、生命^{いのち}の恩人^だていうわけ^で、女ば奥^{さん}に^して、お恵比須掛^けという日^には、股大根、今でもあ^げるていうのが、生命助^けてもら^つた大根であるというわけ^だど。どんびん^{から}りん、す^つから^りん。

239 飯 田

むかし、山形在に、何となく温かい水出つどこあった。嫁だ、洗濯したり、米といだり何かえして、ほこで暮しつたど。

ところが、ある時、米といっだフゴ、何か用忘れて、がらがらその家さ来て、もどつて行つてみたら、フゴの中の米は御飯おまになつていたつけはあ。

急にそこのお湯が熱くなつて、ほして御飯になつていたはあ、ていので、飯田ていう名前が出たど。

240 古九谷の由来

むかしむかし、伊万里とか唐津ていうどこに、高句麗あたりから技術屋来て、非常にいい焼物が出た。

ところが参勤交代の折、いろいろ殿さま方集まって、自慢話が出た。

「おら方の焼物は日本一だ」

とか。ほうすつどまあ裕福な加賀の殿さまが何とかして、おら方の焼物、おら方にもええ土あつから、教えて呉ろて言うたげんども、まずそいっだけは教えらんね。おら方の特産だから教えらんねていう。んだげんども、ほの技法を何とか習いたい。

ほしてある侍に命じて、

「お前、今から行って習つてこい。ほの代り身分をかくして行つてこい」

て、殿さまに命令さつて、その唐津の国さ行つて習つた。ところが侍なもんだから、朝げは早く起きて、薪割りする。日中は一生けんめい窯さくべ方する。まづすばらしい二人前、三人前の勤めをした。ほしてはあ、その旦那さま、そつくり気に入ってしまった。

「おら家の簪になつてけろ」

て言わつて、ほして娘の亭主になつて、あらゆる奥義みな教えてしまった。

ほして、自分もそろそろこれだら焼けると、こういうわけで、思っていた。んだげんどもそこ、気分ええぐなつてはあ、そこき居つくみたいになつて、奥さんもあるし、子どもも出てしまったんだし、ほうしたれば加賀の方から密偵のような者行つて、

「早く、帰れ、早くおぼえて帰れ」

ていう矢のような催促。帰らねどお前の家は断絶するという、きつい達し。何とも仕様なくて、ある日帰つたど。

ところが向うでも、人さ技術教えたならば、お家断絶するというきつい法律あつたんだど。ほして帰つて来いというもんだから、何とも仕様なくて、それは主君のために帰つて来たんだど。

ところが、あれはやつぱり廻し者だったかというわけで、藩から目つけらつて、ほの家は断絶さつたんだど。

んで、今度、加賀さ帰つて来て、こうこういうわけで、向うで抹殺されるに相違ないから、その家族ごと全部つれてこいというわけで、向うさ行つて、みな断

絶してはあ、みな殺さつてはあ、その家も焼がつてはあ、跡も形もなかったとはあ、ほしてこつちき帰つた侍が、やつぱり窯つくつて、土見つけで、うわぐすり作つて焼き始めて、ほん時の絵模様というものは、親子仲よく暮しつた。ほがらかに暮しつた絵ばかりが多かつた。それが古九谷の由来だつたど。どんぴんからりん、すつからりん。

241 義民文太

むかし、今から二百五十年前、榎下に文太という人あつたど。その人、当年二十四才。ところがその頃、不作が続いたり何かして、殿さまだ、米あつめにきゆうきゆうとしていた。百姓とゴマの油、しぼればしぼるほど出る。いわゆるゴマの油と一緒にさつて、毎年土押し。土押しというのは、一間で一坪、という風土にして、一畝歩、一段歩ときめて多いところあれば、それだけ税金よけに上げん

なね。最初九尺で一間としたものが、七尺になり、七尺が五尺になって、今度は四尺にされるということになった。

四尺一間一坪なていうことになれば、とても食うどころか、作っただけ皆やつても足んね。困ったこと始まった。ということで、文太という人は、何とかうまい工夫はないかと、いろいろ策をめぐらした結果、仙台の伊達領さ行つて聞いたら、もつとも七ヶ宿は不作ばりあつて、米、ろくろく穫んねところだげんど、きわめて出しぞくは安かつた。こっちの方の何分の一だ。

「そうか、んだらば榎下を仙台領にする」

て、仙台に働きかけに行くわけだ。榎下衆もひそかにそれを了とした。そして仙台につくべく文太という人が骨折つた。

ところが、榎下でも密告する人がいて、密告でそれがわかつて、捕えられるとということになったときに、まずそれをいち早く知つて、仙台領に逃げるわけだ。

仙台領に逃げたところが、上の山の殿さまから仙台の伊達家さ願い出て、殺さねからお方さ呉ろ、呉ろと、

「殺すんなら、やらねぞ」

という条件ついただけんど、ほん時、奥さんが自分の亭主助けっだいばかりに、姥懷のお諏訪さまさ、百晩詣りした。ところが九十九晩目の夜に、おみ坂のきざはしを自分の亭主の生首が転んで来っどが見えた。首切らつで、「ああ、駄目だな」と思ったら、きのうお仕置だった。そういう知らせがあつて、んならば、女房子どもまででいうのは決まってるというわけで、ある人と手に手をとって、福島さ逃がれた。義民文太というのが語らつでいるのはそういうことだど。

242 「とにかく」の由来

むかしむかし、兎みたい、あだえ可愛い顔してて、足も速いし、武器があつたら、いまとええでないか。武器ていえば、あれさ角つけてみたらどうだべ、こういうことになった。

「はいつあ、ええ考えだ」

ていうわけで、兎さ角つけることにしたんだど。ちよつとの戦いには負けない、青シシ、熊、猿なて、ちよつとの外敵ぐらいは大丈夫だ。ほして角つけてみたれば、さあ、こんど藪から漕ぐに、漕がんね。川渡んべと思つたら、沈む。頭重たくて沈んでしまう。何ともかんとも仕様ない。足はのろくなる。何ともかんとも仕様ない。

やっぱり兎さ角つけるていうのは、わからねていうので、「兎に角」ていうのは、それから始まったんだど。どんぴんからりん、すつからりん。

243 じんつあとまんじゆう

むかしむかし、とつてもむんつん（つむじまがり）な人いだったど。

「じんつあ、じんつあ、縄ないしったか」

ていうど、

「んなえ、縄ほごしだ」

「縄ほごしなて、せっかく縄ったな、なしてほごすのだ」

「いや、ほごして縄うど、倍どころでなく、三倍も持つんだから、おれはほごして縄う」

「なんだ、今日はワラジ作りか」

て言うど、

「んねえ、ワラジほごした」

なんでかんで反対するじんつあ、いだったど。

「雑魚釣りしたか」

て言うど、

「いや、ほんない。雑魚投げしたんだ」

まず、最初なの一つ二つなつたて、最^{さい}一^いだて、頑張るじんつあ、いだったど。
ところが、そのじんつあにも、一つの大きな弱点があつて、鰻頭の話出すと、

顔色かえて逃げて行く。みんなも面白いがって、ほのじんつあいて、あんまりむんつんたげらつで、嫌^やんだぐなつど、まんじゅうの話する。んだど、

「ちよつと用あつから、御馳走さま」

なて、ちつちやくくふるえて逃げていなくなる。

「しかし、あだえ、えびつ（つむじまがり）語って、あだえむんつんたかりのじさま、まんじゅう恐つかないざあ、不思議なもんだねえ」

て語つたど。

「んだらば、どうせこうせ、一つ、まんじゅう攻めにしてけたらええがんべ」

ていうわけで、ある晩、町さ行つて、みんな、栗まんじゅう、白あんまんじゅう、味噌まんじゅう、豚まんじゅうて、いろいろなまんじゅう買つてきた。そして、いろいろ、寄合い進むうちに、ぴよいとまんじゅう、じんつあの前さ出した。たまげつかと思つたら、

「栗まんじゅう、こわいこわい。豚まんじゅう、恐いこわい」

て、片っ端から食いはじめた。お盆一つ、つるつと食^かつてしまった。誰か言う

た。

「じんつあ、じんつあ、あとこわいものないか」
ていうたらば、

「濃いお茶がいつぱい、こわい」
て言うたど。

「なして、こわいもの、ほだえして食う」
て言うたらば、

「こわいから食うなだ」
て言うたつて。

どんぴんからりん、すっからりん。

244 てんしつき

むかしあるところに、相当な金も持っていて、地位もあつて、知しやねものな
いて豪語しているじんつあいだった。

ところが、寄る年波で何食べたか分らねげんども、腹われぐした。ほして医者
あげた。医者家さ帰って行つて、次の日薬寄こさんなねわけだ。ほうすつど薬箱
かつぎの若衆さ、むかしは書生から医者になつたその書生がきて、

「あの、実は、てんしつきがありましたか」

て聞いた。さあ、知しやねものない、ないものないで威張つていたもの、てん
しつきで聞いて、これは何だか分らない。困つたこと始まつたわけだ。医者では、
体の状態で薬もらわんなね。

「ちよつと待つてけらっしゃい」

ていうわけで、荒物屋さ走らせてみた。てんしつきで言うから、漆の類でもあつ
かと思つて、荒物屋さ行つたらば、ある一軒の荒物屋で、

「はあ、昨日まであつたげんど、売り切つた」
きん

ここでもまた知らず嫌いで、ほれ、ないって言わね。

「売れ切つたのでは仕様ない。とにかく町で売ってるもんだな」
と思つて、ほの若ものは別の荒物屋さ行つた。

「てんしつき、おら家では、こんど扱わねことにしたはあ」
「なして」

「若衆、かけらさ上がつて、足切つて、まずはあ、医者さ行つて縫ってもらつたとこだから、とてもでないげんども、おら家では扱わねことにした」

「はあ、何か、かけらみたいな、ギヤマンでもあつかな。そつちにもこつちにもないもんだべ」

「んだは、まず、お寺さ行つて聞かんね」

て、若衆はお寺さ走らせた。お寺またこいつあ人より知らず嫌いなもんだから、

「あるとも、あるとも、三階重ねでも、五階重ねでもある」

ていうたつて。ほして…。

「旦那さん、旦那さん、お寺さまにあつど」

「そつと借りで来て置け、ないではうまくないから…」

というもんで、借りることにして来た。ほだえしているうちに、医者さま来て、

「いや、どうだつす、ありますか」

「ありますとも、ありますとも」

「はあ、ほうか」

「三階重ねから、五階重ねでもあります」

ていうた。

「ほう、それは結構だ」

「出してお目にかけっか」

「いやいや、それに及ばぬ」

「いやいや、それに及ばぬなて、遠慮に及ばぬ」

なて、いうわけで、ほして話したれば、だんだえおかしくなつて、話のつじつまが合わね。聞いた。

「何か、こっちの旦那さん、勘違いしてござらねか」

「勘違いなの、してね」

ほして、お寺呼べていうわけで、お寺呼ばった。お寺、旦那もんだから、檀徒総代なのしてるもんだから、手もみもみ来たわけだ。ほしてこんど、医者さま、
「てんしつきとは、おら方では、オナラのこと。てんしきていうんだげんど、
屁の出ぐあいによつて、あまり腹張つて仕様ないようだったらば、薬と思つて、
お聞きしたんだつけ」

「実は医者の方では、てんしつきとは屁のこと言うのだげんども、なんともんだ
べ。お寺さまの方は…」

て。したらばお寺はからから笑つて、

「ああ、ほうか、医者さまの方では屁のことをてんしつきというか。おら方ので
んしつきというのは、三ヶ組、五ヶ組の盃のこと、てんしつきと言うんだ。ちが
えばちがうもんだな」

どんぴんからりん、すっからりん。

三味線仇討ち

むかしむかし、殿さまの時代に、同じ殿さまに仕える指南番がいた。何かのいさかいで、一人の指南番が闇討ちくって殺さつてしまった。それで、仇討赦免状は出たげんども、たった一人娘、一人で。ほして片脇の相手は指南番でいわれるほどの剣豪だ。かよわい娘一人がなぜして仇討つたらええがんべ、こういうことになって、仇討たねわけにも行かねし、ほとほと困つてしまった。

それで、これは、仇討ちというのは、剣だけで討たんなねざあないがんべ、女の身で女の技術を磨いて、何か勝負する方法はないかて、その女が考えた。そして地位も何も剥奪してはあ、貧乏になったもんではあ、あるどこさ芸者の見習いみたいに入つて、三味線習つた。そしてふとあるとき、お座敷さ行つた。そして三味線ひいっだ。

ところが、最初、お客さまの心臓の鼓動さ合せて、三味線をちゃんかちゃんかちゃんかちゃんかひいた。ほしてそうすつど、こんどはお客さまの心臓の方が三

味線さ合ってくるようになった。それがこう、肌を伝わってくるようになったのが分った。

だんだえ遅くしたり、だんだえ遅くしたりしたら、その人が非常に苦しみはじめた。鼓動が速くなったり、遅くなったり、「よし、これだ」というわけで、こんど指南番の家さ縁あつて、ほして三味線でいろいろ歌うたりして、ほして心臓さぴたつと三味線を合せてひきはじめた。

最初は心臓の鼓動と同じくらいひいっただげんども、あるいは速く、あるいは遅く、ほしてまた速く。

そうしているうちに、指南番は苦しみはじめた。ものすごく速くして、だんだえ遅くしてくる。脂汗が出はじめた。そしてだんだえ遅くして、パタツと三味線とめた。そしたら心臓もパタツと止まってしまつて、ほして大望をとげて、仇とりしたつて。三味線仇討ちという一席でございます。どんぴんからりん、すっからりん。

平種子柿の由来

むかしむかし、越後の国さ、柿づくりの熱心な若者이었다。何十本と柿の木植えて、下肥しもこえをやったり、草刈くしって来てやったり、何かえして、手入れした。

「今年は豊作のようだなあ」

なて、ずうっと見廻したら、その一本の木だけは一粒も柿見えない。

「おかしいこともあるもんだなあ。何か病氣でもついたんだか」

と思つて、葉のねっこ、木の根っこ虫食ったんだかて見たげんども、虫らしいものもないね。

ところが、木の葉がくれに、一粒の柿が見えたど。

「ああ、一粒だけなっていたら」

と思つているうちに、ほいつあもとの一週間もおもったところが、すばらしく大きくなつて、木はしなつてきて、たらづいてしまったはあ、人だらば三・四人も入れるように大きくなつてしまった。

「いやいや、柿、すばらしく大きくなった。がらんぼ（空洞）でないべねえ」
て、こつこつと叩いてみた。ほしたら中から「待った」と聞こえた。

「何、待ったなて言うっだ」

「ちよつと待て」

「はあ、変なこともあるもんだ」

と思つて、何か中にいたんでないかと思つて、腰ささしつた鎌で、そおつと柿の皮えぐつて見たれば、中では白い髭たらしつた仙人と、それより少し若い仙人が碁打ちしつたど。五目並べしつた。

「そら三だ」「待った待った」「いやいや、助言無用、待ったなしだ」「いや、ちよつと待った」

見つだ。またその若者は五目並べというと、三度の飯より好きだ。だんだえのり出して見つだ。ところが年寄りの方はなかなか、やっぱり経験が豊かだかして、先手先手と行っている。

「はい、三だ」「はいこんどは四だ」

止めた。

「はい、こんど、いまつうと（少し）で、どうだ。四三の勝だぞ」

「ちよつと待った」

「助言無用、待ったなし」

て、威張った。そうすつどこちで突つついて、そおつと教えただ。若者あ。

「その四の方とめつど、お前のが四四になつて、逆転勝ちだ」

て、そおつと教えたところが、四三と来たのさ、四を止めた。ところがほの年寄りの仙人の顔色変わった。

「待った」「助言無用、待ったなし」

こつちの方から出て行つた。

「こんな逆転勝ちはどういうわけだ」

ていう頃、その若者はあるまりのり出して行つて、柿の中さポトンと落つてしまった。そうしたけあ、アハハ、アハハて三人で笑つてしまった。笑っているうちに氣ついたか、その年寄つた仙人は、

「こりゃ、お前はこの若い者に聞いたんだべ。んねげば、おれに勝てるわけない」
なて、始まった。何だかだて始まって、陰悪になったもんだから、その若者は
穴から抜けていきなり逃げはじめた。そして、「待て」て言うけあ、バラバラバ
ラバラ碁石投^ぶつてよこした。碁石頭さぶつつけらつではひどいからて、頭おさえ
ながら逃げた。そしてはつと気づいてみたらば、その柿も仙人もいねがった。そ
してそこさ碁石バラバラだと思つたらば、白い碁石だと思つたのは白い柿の種子、
黒い碁石だと思つたのは、実つた黒い柿の種子だった。そしてそいつ蒔いてみて、
桃栗三年、柿八年で、なつてみたれば、その仙人が投げてしまったもんだから、
柿の種子一粒もないがった。それが平種子柿の種なしのはじまりだど。どんぴん
からりん、すっからりん。

茄子の古種子

上の山の殿さまさ、誰より早く献上する百姓いだけど。

負けていらねて、他の百姓、なんぼ真似ても、ほの人になわね。やつと花咲いた頃、ちゃんと茄子にして、早く献上する。その人には誰もかなわねがった。

「あの秘密、どこにあんべなあ」

ていたげんど、分かんねがった。

ところが、その百姓のおつつあんがすばらしい夫婦喧嘩した。したればかあちゃん、へらりなんだから（口が多かったので）、

「茄子なの、はっじえげだな、早くなの、早生にして出すなの、造作ない。古種子蒔くとええなだ」

て、しゃべてしまった。

それからというものは、みんなに真似さつて、殿さまさ献上すんな、一等早くさんねぐなつたど。んだから、女衆うかざあ口多いから氣付けんかねもんだど。どん

ぴんからりん、すっからりん。

248 ぼたもち

むかしむかし、殿さまさ、話家として、追っかけて春先行ったれば、江戸ではぼたもちで言うた。ぼたもちだ勘定して、「ぼたもち、ぼたもち」で言うたれば、秋に行ったられば、「オハギ」で言うようになった。不思議なもんだと思って、これは知ったかぶりしねで、これは聞くに限ると思って、聞いてみたらば、

「田舎では、餅とズホ（嘘）は搗き次第、なの、ぼたもちと身上は大きいほどええの何のて言うげんども、これはいわゆる、地方によっては半殺しなても言うてるげんども、すかつと餅に搗き上げねで、いわゆる花言葉だ。春先はぼたんが咲くから、牡丹餅。秋さか、萩のきれいな節には、お萩ていうたもんだ。んだから秋には『オハギ』ていうて、春は『ぼたんもち』だ」

そう教えてもらった。た。

249 手打ちと半殺し

むかしむかし、信濃の国さ行って、夜泊ったれば、かあちゃんとおつつあん、ひそひそ話しておった。そおと聞いっだらば、

「どうだや、こりや、手打ちにすつか、それとも半殺しにすつか」

いや、はいつ聞いっだ旅人はびっくりして逃げた。そして途中まで来て、とある茶店さ廻って、

「いや、こういうわけで、ほうほうの態で逃げてきた」

て語ったれば、そこのおかみさんが、からからと笑った。

「なして笑ってるんだ」

て、こっちは、はあはあ、はあはあ息切らして言うたれば、

「あんたは、何も恐つかながつことないなだ。この辺では、ソバのことは（手打ち）て言うし、それから、ぼたもちのことは、（半殺し）て言うんだ。んだから、あなたば待遇すつべと思つて、ぼたもちにしたらええがんべか、おソバにしたらええがんべかて、相談したんだもの、おまえ、逃げつことないべな」

て言わつて、またもどつて行つたつたど。どんびんからりん、すつからりん。

250

ホーロクとヤクト

ここらの人あ、峨々（蔵王山麓の温泉湯治場）さ湯治に行つて、豆持つて行つた。煎豆でもして食うべと思つて、むかしはお菓子など、何だてないもんだから、女中さんさ、

「ホーロク貸してけらつしやい」て言うたど。
「えっ？」て聞く。

「ホーロクないべか」

「ホーロク、なあ」て、うまく通じねがったど。

「いや、そいつあ、やぐど（いたずら）だったはあ」て言うど、

「ああ、ヤクトですか」

て、いきなり、ホーロクもって来たど。

251 ドンドンビキ

榎下の宿場の町尻の方に、今でも、ドンドンビキ（ドンドンヒビキ）という地名があつて、普通、あるいてあるくと、ドンドンて、底深い音がする。

これは、昔、八百年ぐらい前に、八幡太郎義家が東北攻めにきた。安倍貞任・宗任の兄弟は磐上山二つ森に布陣した。そして八幡太郎義家が攻めて来たのが分るように、大きい太鼓をあそこに埋^いけた。八幡太郎義家の軍勢がそこ通つて来つ

ど、ドンドンと音すつど、

「ああ、いよいよもって来たぞ」

て、戦闘準備するのに、あそこさ太鼓埋けたんだとて、檣下の古老の人あ言うてだ。今でもそこ歩くと、ドンドンて音がして、ドンドンビキていう。どんぴんからりん、すつからりん。

252 お女めふしいわ伏岩

むかしむかし、この支那からの仏教の伝来と共に、七福神というのが入ってきた。んで、たった一人の女の神さま、弁財天、弁天さまは非常に、自分が器量よして言わつていたもんだから、大いに焼もちやきであつた。

んで、結婚初夜の契りは、家中さ七福神を祀つてあつから、家の中でやつていけない。悪いこと起る。そう語られ、部落の人も信じておつて、部落のはずれさ

すばらしい大きい岩がある。その岩の上が平らで、きわめて景色のええところだ。

その岩で初夜の契りをするのを、部落の集会で決まっておった。んだから誰言うことなく、その岩を、お女伏岩というた。

ところが、文明文化が発達してきて、弁天さま、そだな焼もちやかねぐなつた。そうすつど、お女伏岩で、先に言うたのが、今では梅干岩というようになってしまった。どんぴんからりん、すつからりん。

253 蟻 と 虎

むかしとんとんあつたずま。

むかしむかし、一匹の蟻コと一匹の虎が出会った。ほうしたけあ、虎が蟻コに向かつて、

「何だ、お前、ほだえちっちゃこい体で、何ができるんだ」
て。

「おれは、この辺では、百獣の王だ。どうだ、おれの体、それからおれの顔付き
大したもんだべ」

て。すばらしく虎は自慢した。

「お前なんか、おれから見れば足の一こすりではあ、死んでしまうんだ。つまら
ねもんだな、蟻コなて」

て、さんざんばら自慢した。

ところが、蟻コは、

「いや、お前は一匹だけだべ。一匹狼だの、一匹虎だのていうて、大したことな
いもんだ。おら方には何千何万という仲間がいるんだ。喧嘩したって、お前の比
ではない」

て言うて、二人は自慢話になった。ほうすつど、

「こっじえげだな、ちっちゃこくて、こっじえげだなホラ吹くなて、とんでもな

い野郎だ」

て、虎がいきなり蟻コを足で踏んづけてしまった。ところが蟻コは指の間からくぐって、ほして逃げて行つて仲間呼んだ。

ところが蟻コの仲間、出るわ出るわ、もさもさて出はつて来た。ほして、虎さかりはじめた。体中さのぼつて、どこことなく、食くつついてしまった。虎、何とも仕様なくて、

「いやいや、わるかった。この塩梅では殺されつから、何とか助けて呉けろ」

「こんどから、大ボラ吹かねか」

と、こういうわけで、

「いやいや、大ボラ吹かねし、お前だばいじめたりしないから、勘弁してける」
て、こういう風に言うて、蟻コが勘弁したつた。ほんでやつぱり、世の中というのは、ちっちゃい力でも、まとめつど大したもんだ。決しておろそかにさんねもんだということが分かった。どんぴんからりん、すつからりん。

屁たれ嫁のあとばなし

屁たつで、婚家を追い出さつた嫁は、峠で梨もいで、木綿屋から木綿もらつた。木綿屋がもいでもらつた梨食つたら、とてもじゃないげんども屁くさくて食んねくさいくさいなていうもんでない。とてもじゃない。

「あん畜生、せつかく梨もいで食うべと思つたな、屁ひっかけで食^かんねぐした。ようし、いじめでけんね

て言うことで、追つて行つて、ずうつと追つて来たのを見ただけあ、

「野郎べら、来あがつたな」

ということで、またそっちの方さ尻むけて、さっきの残り、ぶつ放したれば、まず木さたぐついても、草さ手ぐついても何とも仕様なくてはあ、一里も先までぶつ飛ばさつで、とても近づかんねがつた。

ほして、ゆうゆうと実家さ歸つて来たけど。どんぴんからりん、すつからりん。

もう一つは、送らつて来たば、三・四人組の神楽いだっけど。

「何だ、お前だ、三・四人でないど、三味線鳴らしたり、笛ならしたりさんねのが。おら、屁で鳴らしてみせる」

「とんでもない。屁でなの鳴らされっこんだら、お前さ何でも欲しいもの呉る」

「よし。ほうか、んだらば、三味線さバチ結ゆつけろ。笛はこっちの方、むけろ」

というわけで、一発やらかしたらば、すばらしい音楽になった。三味線がチャンカチャンカで、ええあんばいに鳴るし、太鼓がトンコトンコトンと鳴る。笛は風でヒュウヒュウで、きわめてええ音した。

「いや、これは大したもんだ」

日本全国津々浦々まで廻って、相当金もうけて、楽に暮したど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、あるところで、

「赤子んぼこ生まれっど」

というわけで、

「何だか、産み月にしては、腹、ほだえ大きくないようだな」

なて、みんな語ったげんども、腹たいしていたいとも思わね。生まっだとも思わねようだげんども、生まっだようだ。なて調べてみたら、ちっちゃこいな生まっでいだけど。して、はいっ一生けんめい育てた。

ところが、その一寸法師が利発が賢こくて、賢こくて、何でも分かっているど。んだげんど、ほだえちっちゃこくては縁組みもさんね。こりや困ったもんだて、そこの家は元々あんまり金持でないがったど。

して、節分の日、どこでも「鬼は外」だった。ところがその家だけは、

「鬼はみなどこでも追い出されっこんだら、おら家だけは、福は外で鬼は内すん

べ」

ていうてだ。他では、〈福は内、鬼は外〉て言うて、豆ばらばら、ばらばらてぶつつけられつ時、おらえの家だけは部落で一軒だけ、鬼は内、福は外だった。んだから、みんな、鬼だそこさ来て休んだ。そして休むときは、みんな人気なくして、鬼ば休ませつどもんだ。

ところが、みんな出はって行くな、ちっちゃこいもんだから、出はって行くの忘つではあ、そだえしてつ時、鬼ざあ、恐つかないもんだから、殺されるなて聞いたもんだし、仕方ないから、床柱の日割れの孔の中さ隠つでだど。ほうしたれば、鬼だ来たけあ、

「いやいや、まず休ませてもらうべ」

なて来て、話した。

「何だか人くさいね。人いたぞ、人くさい、くさい。ほっちの方くさいなあ」

て来たけあ、嗅ぎ^かつけらつだつて、床柱さ来て、

「ここくさい」

て、匂いかいでいっ時、一寸法師はいきなり鼻毛伝わって、鼻から入って、腹の中さ入って行ってしまった。ほうすっど、ピーッッピーッというたげんども、出はってこないはあ。そして腹の中さ入っていってしまった。ほっちこっち針でつついてけだ。

「いたい、いたい、腹いたい」

「こりや、こりや、おれの言うこと聞くか」

「何でも聞く。あんまり突つつかねで呉ろ」

「よし」

「お前、どこにいたんだ」

「おれ、腹の中にいた」

「いやいや、こりや困ったもんだ」

て、鬼だ、いた。青くなつた。

「おつつあん、何した」

なて、子ども鬼。

「いや、腹いたくて何とも仕様ない。中さ、おかしなもの入って行った。人みた
いな、ちっちゃこいな入って行った」

「入って行ったなて、どっからだ」

「いや、鼻の孔から」

「んだから親父、鼻の孔大きくして歩くな」

なていたげんど、何とも仕様ない。で、

「んだらば、突つかねから、どうだ、おれの言うこと聞くか」

て言うたど。

「銭、なんぼでも持って来て、みなこつちの家さ寄こすから、助けてばりけろ」

「うん、銭も持ってこい。んだげんども、お前だ、こうして銭出していんのは、

打出の小槌から出していんのだべ」

「ほだ」

「銭、たんといらねから、打出の小槌すぐこさ持ってこい。んだど、お前の腹の
中からすぐ出はってやつから」

ほして、鬼どもだ、家来さ命じて、錢と打出の小槌かついで来ておいた。ほうしてはあ、こんどは福は外、鬼は内ではなくてはあ、どこの家も当たり前になつたもんだから、鬼だも、退散して、そこから行くとき、そこさ置いて行つた。一寸法師は、なえつたて、そだな大きい打出の小槌打ちふることできないわけだ。そうすつど、こういうわけだつて、

「おれば大きくなるように願つて、打出の小槌ふつて呉ろ」

と、こういうわけで、振つてもらつたれば、一ふりに何尺とおがつて行つて、当たり前の人間になつた。

ほして、その話聞いっだお姫さま、

「ほだえすばらしいものもつていたらば」

ていうて、京さのぼつて行つて、ほして、打出の小槌持参で、お姫さまの聲どにおさまつたけど。

どんぴんからりん、すっからりん。

お伽衆の昔話

— 佐藤家の昔話について —

一、はじめに

上山市榎下の佐藤家（当主佐藤孝一）の先祖は佐藤家の口伝によれば、元禄時代以前に京阪地方に居ったと言う。そして御伽衆仲間であつたと伝えている。ところが、御伽衆仲間での「語りくらべ」をやつて破れたために、都落ちして、上山藩主松平家に仕えることになり、元禄年間に上山市榎下に居を定めたという。当時、榎下はすでに参勤交代の際の宿場町として栄え、御伽衆として藩に仕えるかたわら、農業を営み、半士半農の生活をしてたものと想像される。そして孝一氏の祖父権六氏は、実に、自ら二千話を管理していたと語っていたものだというが、その伝承の方法に大きな特色が見られる。佐藤家の昔話から見れば、伝承者としての自覚から来たものとして、

(1) 伝説的な語り口をもって昔話の数をより多く管理した面。

(2) 棒木に昔話を刻んで管理した面。

という特長を上げることができる。

さらにまた、檣下部落は宿場町という特別な場所であり、若衆組が部落の公的な「契約」と結びついて、部落の中心をなしていたと考えられる。煙硝はたきや役米の積み換え作業の苦役から、助郷役としての出役などが課せられていたから、若衆組の果たした役割は極めて大きかったといつてよい。こういう外的条件と、昔話伝承の結びつきとして考えられるものとして、

(3) 藁仕事小屋と称する若衆小屋での若衆と、佐藤家の御伽衆または昔話の語り手としての結びつき。

(4) 年中行事として、正月十五日に寺院に集まって行われた「ホラ吹き会」での語りくらべ。

などがある。佐藤家の昔話伝承を、以上のような内的条件と外的条件から考察しようというのが、小論の意図である。

二、佐藤家の昔話

佐藤家では、かつて二千話を管理したというが、現在の当主佐藤孝一氏の祖父権六氏がそうであったという。孝一氏は現在まで二二一話を語っている。そして今度の採訪の分を含めると二五五話となる。

二五五話の内容を『日本昔話集成』（関敬吾編）によって分類すれば、次の通りである。

1	動物昔話	一六話
2	本格昔話	四八話
3	笑話	六二話
4	形式譚	二話
5	補遺	二話
6	伝説	二九話
7	世間話	九五話

8 その他

二話

以上から推察して、まず第一に「笑話」「世間話」の全体にしめる割合が圧倒的に多いということ。それに他地方のものとして伝承されているものを伝説または世間話風に語ったものが目立つ。四国地方に語られる「吉四六話」の一つとして、「讃岐の吉内」という表題の昔話がある。また津軽地方の伝説という形で語られた「弘法手拭」があり、江戸小咄として巷間に流布したと思われる「大岡裁き」が七話もあり、「左甚五郎」が五話もある。また秀吉・家康・家光にまつわる講談からの世間話風な語り口をもつものがあり、「彦市ばなし」も二話伝承されているし、一休和尚、艶笑譚なども江戸時代に流布した小咄風に伝えている。

檜下部落は宿場町として栄え、参勤交代の要路にあり、城下町上の山の次の宿場、帰参の際の上山城に入る前の宿場として重要な場所であったことはうなづけよう。そういう土地であったから、他国の昔話が流入したということは十分想定できる。しかし佐藤家の昔話は単にそれだけのものではなかったことも明らかである。孝一氏自身、祖父権六氏の昔話をよく聞き、それを伝えねばならないとい

う気持ちを子どもの時分より持っていたとも言い、他の人が語るものは大抵祖父から聞いて知っていたので、他人の語る昔話にはほとんど興味がなかったとも言っているが、むしろ昔話を伝承する条件自体も佐藤家や部落組織及び部落の行事の中に存在したと見なければならぬ。

三、伝承の諸条件

伝承の条件を大別して、伝承者としての内的な条件と、部落組織や部落行事との関わりから来る外的条件に分けることができるとしたが、それらのものについて考えたい。まず内的条件について考察する。

(1) 伝説的語り口

世間話や伝説は、当然伝説的語り口をもつてするのが自然であるが、佐藤家の昔話の場合には、「動物昔話」「本格昔話」においてさえ、伝説的語り口で語る場

合が多く、それは場合によっては昔話の語り口にふさわしいとは必ずしも思えない、文章的な語り口、講釈的な語り口も混ってくる。「鉢かつぎ姫」の語り始めに、「むかしむかし、鉢かつぎ姫という昔とんとでございます。むかしむかし、あるところに…」

と語り出す例が見られるし、「むじなむかし」では、

「むかし、檣下は参勤交代の折、七ヶ宿を通つて福島に抜け、江戸へ江戸へと、下になにと先触れして、住民を土下座させながら通つた頃、その頃はもちろん車道などはなく、自動車、荷車などもない、馬で、あるいは人で荷物や人を運んだ時代、その頃の実話で…」

と語り出す。このことは佐藤家の職業的語り口でもあるといえる。お伽衆または咄衆としての威厳なり、あるいは、村なり部落なりの儀礼の指示をしたりするという本来の姿の片鱗とも言えなくはない部分である。事実、後述する部落の中にある「藁仕事小屋」での佐藤家の立場などを考えても明らかである。

また、「水蜘蛛」の昔話が地名である「蜘蛛手沢」「松取り沢」「蜘蛛抜き沢」の

地名伝説として語られていることや、「姥捨」「蛙女房」「屁たれ嫁」「狐むかし」などについても同様であり、話数をふやす必要性が職業柄、こんな形で伝承形態を変えて行つたと想像してもよいのではないだろうか。

(2) 棒木に刻んだ昔話

昔話を刻んだ棒木は、祖父の代には約五十本とか二百本を数えたというが、一部その棒木を復元してもらい、現在まで七種の棒木の形が明らかになっている。当時文字を持たなかったために、棒木に昔話を刻んだものか、佐藤家独自のものは明らかでないが、二百本からの棒木があつたということは、少なくとも二百話以上の昔話が、形をもって伝承されたものであり、祖父が二千話を管理したということも、それと関係がないとは言えない。それに、一本の棒木に一話を刻みつけただけでなく、場合によっては二話も三話も刻み込んだのではないかという想像も成り立つ。例えば、「ネジ木」といわれる棒木は、木の若い幹や枝につる草や木が巻きついて、そのまま成長したもので、よくブドウづるのからみついたま

ま大きくなった櫨の木などを見ることがある。このような「ネジ木」の棒木は、しばしば「蛇女房」や「蛇簪」などの、『蛇』をテーマにした昔話を刻んだ棒木とも考えることができる。現在まで佐藤家に伝承した「蛇」に関する昔話は次のようである。

① 「姥皮」…水乞型の「蛇簪」譚に続くものである。(一〇一B 「蛇簪入」水乞型)

② 「おりや峠の蛇」…伝説として語られ、同型のものに西置賜郡小国町にも伝承されている。

③ 「蛇女房」…(一一〇「蛇女房」)

④ 「大蛇の石」…伝説。

⑤ 「蛇簪」…(一〇一A 「蛇簪入」芋環型)

⑥ 「沼の台小町」…(一〇一A 「蛇簪入」芋環型) 伝説として語られている。

また、以上の棒木の他に、次のようなものがある。

『へらへら話』 木の先をへら状に削ったもの。

『長い話』 棒の長さは普通のもので一尺二寸程度であるが、それよりも長く作つたものである。

『虎猫の恩返し』 棒の先を斜めに切り、先の部分を猫の耳型に削り、棒の途中の皮を平行に三か所削りとつて、虎猫の毛皮の文様とした。(二三〇「猫檀家」)

『三枚のお札』 木の皮を三か所正方形に切りとつている。(二四〇「三枚の護符」)

『二反の白』 木の皮を二か所切りとつてある。(四八五「二反の白」)

『加藤清正の虎退治』 伝説で、棒木の先の方に小枝を一本だけ残して、加藤清正が、朝鮮で虎退治をしたとき、三双の槍の一つが虎に折られたという形にしたものである。

これらの棒木は材質が白く弾力性に富んだコシアブラかサワグルミであつて、細工物によく使われる木である。

次に、佐藤家の昔話を支えてきた、外的条件について考えたい。

(3) 藁仕事小屋

部落の、昔話を伝承する条件として考えねばならない一つは、この地域の若衆小屋とも言うべき「藁仕事小屋」の制度である。山形県の山形地方及び置賜地方では、各家々が木小屋と呼ばれる農作業または農具あるいは冬の薪などを置いておく小屋をもつ。その木小屋はそのまま若衆小屋にする場合も多かったが、上山市檜下では普通、秋の穫入れが終わると各家の若衆が出て、冬の藁仕事を共同で行う小屋を作る。各家から人足として若衆が全員出て、一人分（一日分）ずつ出し合う。檜下部落では、藁仕事小屋を上部落・下部落・新部落の三か所に、それぞれ一つずつ建てたものであった。場合によっては既存の小屋を一冬だけ借りることもあったという。佐藤家は下部落に家があるが、この藁仕事小屋を建てるための人足には出なくともよいことになっており、その代わり、佐藤家はこの三部落の藁仕事小屋に所属し、「株Ⅱ席」を各小屋に一人分としてもらっている。そして、小屋の要請があれば、昔話を語りに出かけなければならなかったものである。藁仕事小屋を利用する若衆は十五才から二十才前後の男の若衆であり、炭焼きに

出て冬期山に入る者とか、結婚した男子は、特に会合がある場合を除いては、藁仕事には参加することなく、また二・三男も全員参加する比較的自由なものであった。当然その「藁仕事小屋」で昔話を語るということになれば、藁仕事をしたりする若衆に語りかけるものであったから、「笑話」「世間話」「艶笑譚」など年令にふさわしいものが、語りの中心になるのも自然であったと考えられる。佐藤家の昔話の中で、「世間話」「笑話」が圧倒的に多いのは、そのような条件から来たものであったと見てよいのではなからうか。そしてまた、若衆に対し、この語りということになれば「あいづち」を特に必要としなくなり、話数を豊富にするといった形になって行くことも当然といえるかも知れない。

(4) 「ほらの吹く蔵・うその語郎」

檜下部落では、昔、福聚寺という寺があつて、部落の中心をなしていた。その福聚寺で正月の十五日の小正月に「ほらふき会」が開かれたものであったという。節分の夜に、備後一の宮の吉備神社で行われた「ほらふき会」の場合と同様に、

ここ檣下でも行われていたものである。正月十五日は、「鳥追い」の行事から始まり、「田植」「団子さし」「祝わ祝わ〓おさいと」が行われるが、同時に行われた「ほらふき会」は明治年間まで続けられていた。この「ほらふき会」で優勝した者は、その一年間の村人足が免除されたものであった。宿場町であり、上山藩の煙硝作りの行われた場所でもあったから、部落の人々にとって人足はかなり大きい負担であった。村人足の内容は①煙硝叩きという火縄銃の弾丸作りであった。②米の積み換えで、宿場町であったから、各大名の宿があり、参勤交代の際の糧食の集荷が行われ、保存のために俵につめた米を、積み換えする仕事であったという。もちろんその他にも、③助郷として参勤交代の行列の際の荷物の運搬があり、④部落自体の道草刈り、道路の普請、橋の掛け代え、祭礼のたてもとなどがあったし、さらには「藁仕事小屋」の設置の際の人足もあった。その「村人足」が一年間免除されることは、その家にとってきわめて大きな労働力の利益となったことは論を待たない。従ってこの「ほらふき会」で優勝することは、その家にとって二重の利益であり、名誉であったと言える。

特にこれが正月十五日に行われたのは、正月元日から十五日までを「前の正月」と呼び十六日から二十日までを「後の正月」と呼ぶ檜下部落の、「前の正月」の最後の日であり、この日の行事全体が農業の予祝行事に関係があるところから見て、予祝行事の一つと見ることもできるのではないだろうか。この「ほらふき会」に優勝すれば、その人に「ほらの吹蔵」とか「嘘の語郎」という一種の称号が与えられたものであった。現在も部落の一軒は「嘘の語郎」という屋号めいた呼ばれ方がされているという。多分佐藤家もその号をもらったのではないかと言うが、佐藤家の昔話の中にも、その会を活写した「ほら吹きくらべ」「ほら吹き大会」(四九二「法螺童子」、四六五「雀捕り」)や「天気占い」(四二九「もとの平六」)などが伝承されている。それにこのような「ほら話」自体が藁仕事小屋で伝承されるに適した昔話であることを考えると、そのような外的条件によっても、佐藤家の昔話が、豊富になったと想像することは、あながち理由のないことではない。また隣部落に「とりおやじ」という語り上手があつて、よくそこに行つて昔話を聞いたことがあるということなども加えてよいかも知れない。

四、おわりに

佐藤家の昔話は御伽衆の伝承してきた昔話であるといつてよいが、その昔話自体の特色は、すでに語られた二百五十五話の中に、すでに見られるといつてよい。世間話・笑話の類が圧倒的に多く、艶笑譚も多い。それが主に藁仕事小屋を通して語られ続けたということである。しかしそれは必ずしも伝承ということではなくて、若衆を楽しませたものと考えた方がよいのではなからうか。昔話の伝承はむしろ佐藤家の囲炉裏端であり、その際、当主孝一氏が言うように、昔話の伝承者としての誇りと義務があるという自覚がその伝承を彩っている上に、佐藤家の伝承を豊富ならしめた理由として、棒木に昔話を刻んだ、そして記憶したこと、藁仕事小屋で職業としての語りを披露しなければならなかったこと、更に部落自体の行事として、「ほらふき会」の存在も大きかった。上山藩における「お伽衆」の存在を直接立証するものは、今のところ発見されていないが、佐藤家が上山藩に仕えた「お伽衆」か「咄家」であったということを伝えており、また隣藩米沢

には「お伽衆」が存在し、その米沢から上山藩に賓師として招かれ、講義を行ったという記録が、文政年間の文学者、服部豊山、安政六年には漢詩人であった山田護堂などにあることを見ても、佐藤家の「お伽衆」または「咄家」としての役割は、佐藤家に伝承されてきた昔話などを通じても納得できよう。

本稿は昭和四十八年度日本民俗学会年会に発表したものの一部である。佐藤家に関係ある後半の部分だけをここに記して、御批評を請う次第である。

夢のほたる

佐藤家の昔話(六)

昭和四十八年十一月一日 発行

話者 佐藤孝一

編者 武田正

南陽市三間通二三二の三

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

夢のほたる 佐藤家の昔話(六)

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十二年十二月十日

東北文教大学短期大学部民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

東北文教大学・同短期大学部附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

- 『西川町の昔話』(一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『むかしあったけど』(一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『米沢市築沢の昔話』(一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『米沢市塩井の昔話』(一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『安楽城の伝承(一)』(一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『安楽城の伝承(二)』(一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊)
- 『安楽城の伝承(三)』(一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊)
- 『高畠町和田の昔話』(一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
- 『及位の昔話(一)』(一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
- 『及位の昔話(四)』(一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊)
- 『及位の昔話(五)』(一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊)
- 『佐兵ばなし』(一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話(一)』(一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『お婆の手ん箱(一) 阿部キヌオさんの語り』(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)
- 『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)
- 『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

『なら梨とり 赤湯の昔話』(一九六七年一月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(一) 民話のこころ(対談) 浜田広介先生と海老名ちやうさん』

(一九七一年四月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(二) 海老名ちやう昔話補遺』

(一九七一年八月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『たかみねと秋田の昔話』(一九七八年二月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『佐藤家の昔話(一) 山形県上山市檜下』(一九七二年七月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鳥吞爺 佐藤家の昔話(二)』(一九七二年九月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鉢かつぎ姫 佐藤家の昔話(三)』(一九七二年十二月発行、二〇一〇年七月再刊)

『天とひばり 佐藤家の昔話(四)』(一九七三年三月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『へらへら話 佐藤家の昔話(五)』(一九七三年七月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『夢のほたる 佐藤家の昔話(六)』(一九七三年十一月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『ぬるくす男 佐藤家の昔話(七)』(一九七四年十月発行、二〇一〇年十二月再刊)